

# あるむせお

府中市郷土の森だより

No. 14

*al museo*



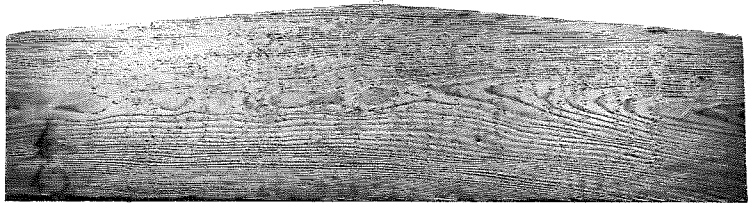
## 大鉄仏阿弥陀如来坐像（国 重要文化財）

高さ158cmを測る、現存鉄仏中最大の坐像。左襟の銘から、建長5（1253）年に明蓮という僧が勧進し、藤原助近に造らせたことがわかります。伝えによると黒鐘谷戸（現国分寺市西元町4丁目）より掘出されたともいいますが、確か

なことはわかりません。おそくも江戸時代の後期には六所宮（現大國魂神社）境内にありましたが、明治の廃仏毀釈により境外へ移され、現在は本町1丁目の善明寺に安置されています。

# 高札

おなじみの時代劇では、人出の多い所へ役所の手下が人相書などを書いた木札を持って走って来、地面へ突立てるとわいわいと人が集まって来ます。高札というともずそう



④駄賃や人足についての伝馬高札

いうイメージではないでしょうか。しかし、実際の高札、或は高札場はそんなに簡易で臨時的なものではありませんでした。

村明細帳とか村鑑と名づけられている、江戸時代の村政要覧ともいべき古文書をみるとたいいどこの村にも「一、御高札場 壱ヶ所」とか「一、御高札〇枚」という記載があります。いわば村に常設の施設だったといえるでしょう。

「新編武蔵風土記稿」で府中市域の12か村を調べると、下染屋村以外は、やはり村の中央や街道に面した所に高札場が設けられていました。その他、本町・番場宿・新宿の三町で構成する府中宿と、それに近接する六所宮領の八幡宿は合わせて1か所の高札場でした。この場所は展示室の“府中宿町並模型”でも確かめられますが、甲州街道と相州道、川越街道が集まる府中随一の辻で、今でも現地は当時の面影を残し、東京都の旧跡にも指定されています。

さて、この高札場には明和8（1771）年8枚、文政4（1821）年9枚、天保9（1838）年10枚の高札が掲げられていた記録があります。天保9年を例にとると次の様な内容の高札でした。

- ①親子兄弟仲よく暮せなど生活態度の事
- ②切支丹禁止の事
- ③毒薬やにせ金を作るなど商売に関する事
- ④宿場の駄賃や人足の事
- ⑤府中宿からの④の具体的な定価一覧
- ⑥火付見逃しや火事場泥棒の禁止の事
- ⑦農民の徒党・強訴・逃散の禁止の事
- ⑧鉄砲禁止の事
- ⑨鷹番は停止するが以後も捕鳥禁止の事
- ⑩⑥を値上げした額一覧

ただ、この様に数が多いのはここが宿場だった為で、普通の農村では②や⑥を主に3～4枚だった様です。また、港の浦高札や宿場の④⑥の様にその地の特殊事情よって出されたり、同じ火事の事でも都市と農村では文言が一部異なるということもありましたが、幕府の決めた多岐にわたる禁令や法令を常に人目につく所にしておくことが高札の役目でした。

この様な掲示は制札とも呼ばれ、室町時代から多く見られる様になりました。多摩地区にも小田原攻略後の秀吉が出した制札が記録されています。そういう歴史を引継いだ江戸幕府は庶民の統治にこれを巧みに利用したといえます。特に先の①②③④⑥は大高札とも呼ばれ、江戸初期から出されており、施策の方針をよく表わしています。

新井白石が補佐した6代将軍家宣の時までは法令改正の他、元元や将軍の代替り毎に高札も書替えられていました。しかし、8代吉宗からは新しく追加されたものは別として、書替えしないことが慣行となり、白石の案文による正徳元（1711）年五月と記された高札が幕末まで掲げられることになりました。

しかし、木に墨書したものですから、長らく街頭に出されていると字が薄れたり板が傷んだりもします。そういう際には名主の責任で文字の部分をなぞる“墨入”や破損の修理を行いました。高札や高札場の管理を厳重にすることは、これが庶民にお上の威光を知らしめる一番身近な場所だったからとも言えるでしょう。（B）

# バードセンサス

今流行のバードウォッチングは、各種の野鳥を見た、見ないのレベルで確認するものです。この結果、地域に棲息する種類、或は季節を追って移り変わる種類をリスト化することは可能ですが、それ以上の考察を引き出すことはできません。野外調査ではこのバードウォッチングを基盤として、一定地域に棲息する個体数を数え、その変化を統計的に処理することを目的とします。これをバードセンサスと呼び、個体群生態学上の重要な役割を果たします。

## =線センサス=

道ばたセンサスともいわれ、比較的多く用いられる方法です。ひとつの道に沿って歩きながら、左右それぞれ25m位の範囲を、後方に向かって進む個体のみカウントしていく方法です。このときの25mは肉眼で追える限界距離で、後方に向かうものだけを追うのは、前方へ通過し再び戻るものをカウントすると2度数える格好になってしまうからです。調査の時間帯は、鳥の活動する日の出から9時頃が最適でしょう。ひとつの調査で年間を通して行う場合は、場所と時間帯を必ず統一させ、天候、気温なども記録しておきます。また、調査地の環境を明らかにすることも重要で、特に植生環境を示す必要があります。常緑広葉樹林、常緑針葉樹林、落葉広葉樹林、落葉針葉樹林の区別を主に、樹種さらには森林構造がわかればベターです。鳥は森林の空間を利用して棲息するので、各界層にどれだけの空間が存在するのかを知るためのデータになります。

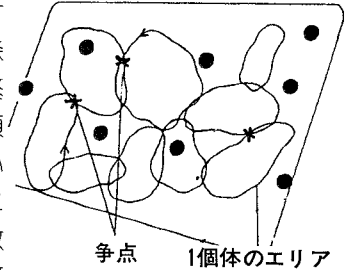
## =絶対数調査(全数調査)=

特定の調査地で種類と個体数を調べる手段で、かなりの経験と技術を要します。

①追い出し法—草原や湖沼などで人が一気に追い出しをかけ、驚いて飛び去る鳥を瞬時に識別、

カウントしなければなりません。当然調査は多人数で行われなければ不可能です。

②テリトリーマッピング法—ある種の雄の縄張りを見出す調査方法です。森林の区画内で、繁殖期のみ、1種類に限り調査を行います。調査区画には、相当数の人数を配置します。繁殖



●=調査者  
(正式なテリトリーマップには記さない)

期の雄の行動を利用するわけですが、巣を中心に円を描いて飛行する鳥が、別のエリアから飛んで来る同種類の鳥と交わる接点で争いを起こします。この接点から縄張り(テリトリー)を推測することができるのです。

## =集計方法=

No.	種名	個体数		出現数	
		実数	優占度	出会った数	出会った頻度
1	シジュウカラ	50	75%	10	

上記のような表に書き込んでいく形が簡易な方法でしょう。このときの優占度とは、1種の観察個体数/観察した鳥の総個体数×100(%)です。この他にも相対出現頻度、個体数密度を出す場合もありますが今回は省略します。

さて5回に渡ってフィールド調査の一端を解説してきましたが、まだまだほんの一部しか紹介するに到っていません。あくまでもこんな方法があるというだけで、実際の目的によってオリジナリティーが要求されることは以前にも述べたとおりです。大切なのは、何度もフィールドに出て動植物の生命の息吹きを五感で捕えることです。自然を理解するための第一歩は、こうして踏み出されると思います。(N)

## 多摩地区のクルリ棒について

後藤 廣史

クルリ棒は穀物の脱穀、脱粒、脱芒<sup>だつぼう</sup>を行う農具で、大麦、小麦、裸麦、陸稻、粟、稗、黍、蕎麦、大豆、小豆など、さまざまな穀物が対象となっています。刈り取った穀物を二ツいっばい広げてクルリ棒で打つ。柄を持って打撃部を回転させて行うもので、この作業をポウチと呼び、ポウチ唄も数多く伝承されています。

クルリ棒は、打撃部(回転棒)、軸部(回転軸)、柄部という3部分から構成されるのが普通で、この3部分が分類の指標となっています。府中市域では打撃部が割竹を束ねたもの、あるいはエゴ数本を束ね藁繩<sup>わらなわ</sup>を巻いたものの2種類がみられ、それら打撃部を回転軸に挿し込み、回転軸ごと回転させるものですが、このような結束型のほかに他地域では、打撃部が丸太の一本木型などが多くみかけられます。そこで近年の調査研究や筆者調査により形態分類を試み、神奈川、東京、埼玉の形態分布図を作成してみました。回転軸の有無、回転軸と打撃部の結接の仕方、打撃部の素材等により分類したものです。

この分布図をみてまず目につくことは、多摩地区の府中市を含む旧北多摩郡に、エゴ(O)と割り竹(△)の結束型が集中してみられること、それに対して旧南多摩郡、(旧)西多摩郡では一本木型であること、つまり多摩川を境に顕著な違いが認められることです。特にエゴは地域性が顕著で、旧北多摩郡や埼玉県入間地方といった武蔵野台地に限られています。旧北多摩郡ではエゴと割竹が併存し、清瀬市、昭島市ではその他に丸太の一本木型を加えた3形態併存が確認されています。この新旧関係をみていきますと、清瀬市や昭島市では、丸太の次にエゴが入ってきたとの伝承があり、また東大和市や府中市では、エゴを使っていたところに割竹が入ってきたとしています。このことから丸太→エゴ→割竹という時代変遷が考えられます。現在のところエゴと割竹しか見出せない旧北多摩郡の市においても、エゴに先行する丸太の一本

木型があつたのではないかと考えています。

次に割竹の導入の時期について、興味ある報告がされていますので紹介します。埼玉県では本来は一本木分布地域に割竹が導入され、この時期は比較的新しく、戦前から戦中のことと報告されています。また清瀬市では、大正末から昭和のごく初期にかけて割竹が使われるようになったそうです。埼玉県と多摩地区ではその導入時期に若干の年代差はありますが、おおそ大正末より普及していったものと考えてよさそうです。さてこの時期は、多摩地区に足踏み脱穀機が導入される時期であり、割竹クルリ棒の導入と期を一にしています。小麦は足踏み脱穀機にかければ、ノゲもよくとれ、ポウチする必要もない程であつたといわれます。しかし大麦はノゲも硬く、実から離れにくいので、足踏み脱穀機導入後もポウチしなければなりません。このようにポウチの大半が大麦にむけられるようになった時期に、能率もよく、ノゲもあまり舞わない割竹クルリ棒が考案され、普及していったのではないかと報告されているのは(清瀬市)、たいへん興味深い指摘だと思います。この場合足踏み脱穀機の、当時の生産地を考えなければなりません。府中市をはじめ多摩地区では、川越市の片山製作所や木尾製作所で生産された足踏み脱穀機をよくみかけますが、割竹クルリ棒の発生、普及を考えるうえで、川越市あたりがひとつのキポイントになるのではないかと考えられます。

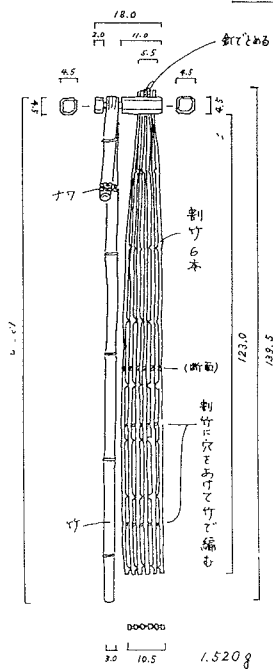
以上、多摩地区にみられるクルリ棒の形態と分布を中心に若干紹介してみました。小稿は拙稿「南関東のクルリ棒－東京都多摩地区を中心として－」の一部をまとめたものです。

## \*引用文献

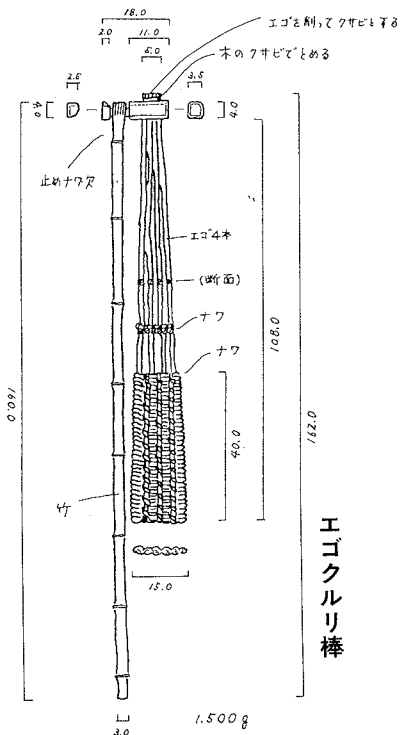
1. 大館勝治「いわゆるクルリ棒について」(埼玉県立歴史資料館『研究紀要第8号』所収、昭和61年3月)
2. 関東民具研究会『南関東のクルリ棒』平成元年10月
3. 府中市郷土の森『府中市郷土の森紀要第3号』平成2年3月

クルリ棒形態分類 (筆者)

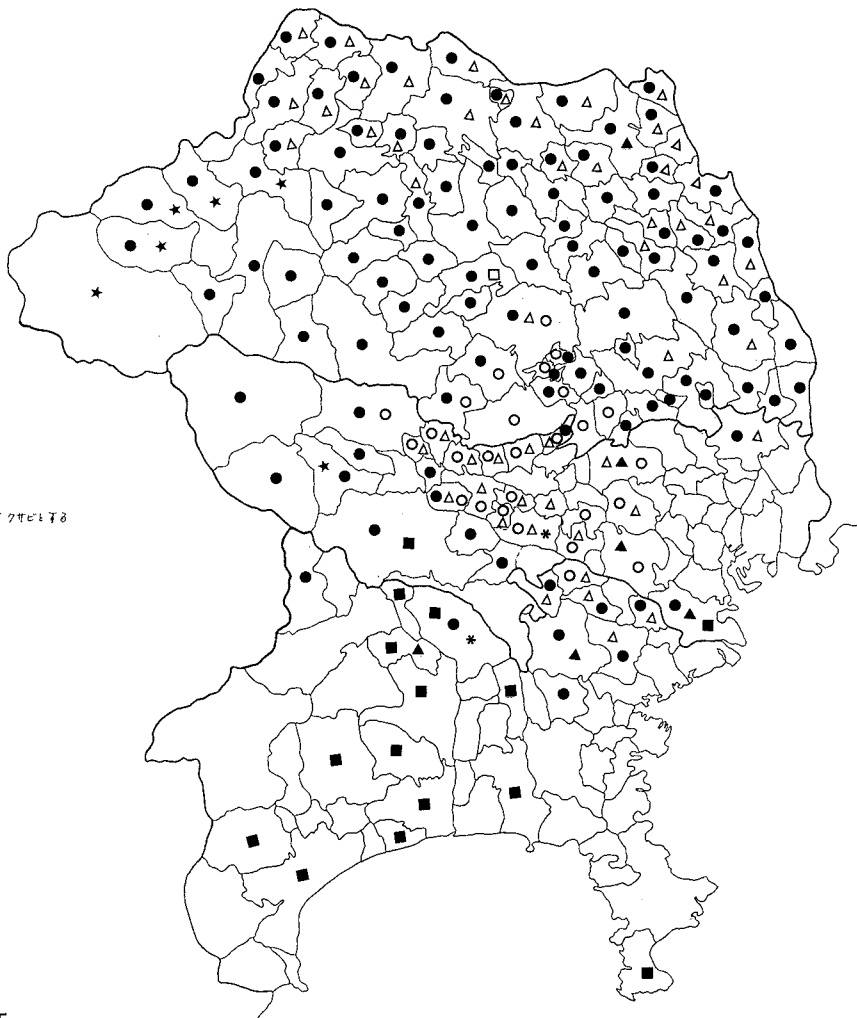
- クルリ棒形態
- 回転軸・無 — 回転軸と打撃部が鉤の手をした一本木 — I型 (一本木型) ★
  - 回転軸と打撃部を当て木で挟み固定 — II型 (一本木型) ▲
  - 打撃部にホゾ穴をあけ回転軸を挿し込む — III型 (一本木型) ■
  - 回転軸・有 — 回転軸にホゾ穴をあけ — IV型 (一本木型) ●
  - 打撃部に挿し込む — V型 — V-①型 (結束型割竹) △
  - (結束型) — V-②型 (結束型エゴ) ○
  - V-③型 (結束型鉄) □
  - IV型 (一枚板) \*



割竹クルリ棒



エゴクルリ棒



形態分布図

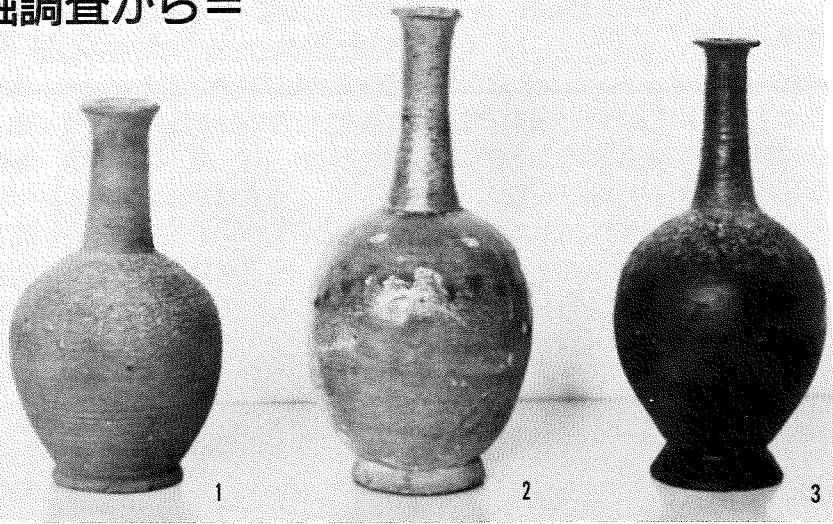
埼玉県については大館氏「いわゆるクルリボウについて」より引用し、東京都・神奈川県については関東民具研究会『南関東のクルリ棒』および筆者調査により作成。

## ＝最近の発掘調査から＝

遺跡からは、いろいろなものが出土しますが、その中でも一番多く出土するのが土器です。土器は、縄文時代から作られるようになりますが、その形や種類は、非常に豊富です。もちろん、この府中に国府のあった時代にもその数や種類はたくさんありました。国府のあった奈良から平安時

代に使われていた土器は6種類ほどに分けられます。土師器と須恵器が一番多く一般的なもので、このほかに灰釉陶器・緑釉陶器、また、須恵器と土師器の中間的な土器の土師質土器、中国で焼かれた白磁などがあります。形の上では、坏・壺という今の茶碗のようなもの、盤・皿・高盤の皿類、蓋や甕・壺類などが見られます。

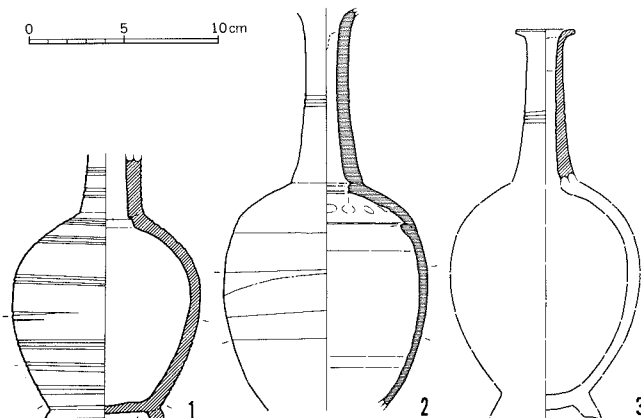
ここでは、府中町から出土した、水瓶という一般の遺跡ではほとんど出土していない土器について見ていきましょう。この水瓶とは、水などの液体を貯めて置くもので、長頸瓶とよばれる壺の仲間の1つです。形は、細い頸の部分と、卵型もしくはそれに近い丸みを帯びた胸部に高台が付きます。府中町で見つかったものは、口



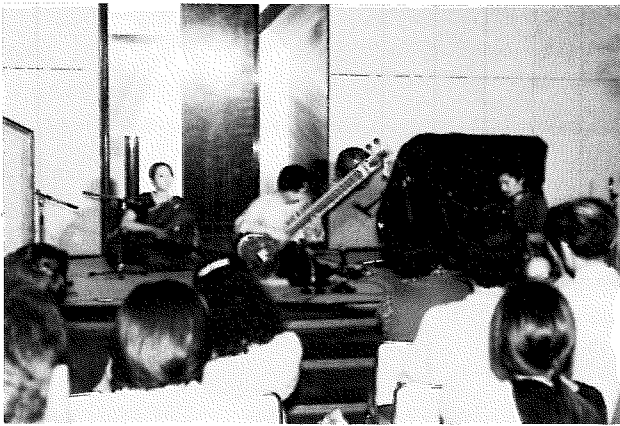
縁部と高台部が欠けていますが、ほぼ全体の形が分かるものです。現存部分の高さは21.4cmを計ります。これは灰釉陶器で、白色をした地肌にやや濃い透き通った緑色の釉が頸から肩部に掛かっているものです。作るときの手順は、まず胸部を作りそれに穴の開いた円盤で蓋をし、さらにその穴にあらかじめ作っておいた頸部をくっつけます。この土器が出土したのは、竪穴住居跡からですが、埋め土の上の方からなので、他所で使われたものかここに捨てられたものと考えられます。

この府中町で見つかったもののほかにも、市内では2点出土しています。この2点は、どちらも須恵器です。以上3点の出土位置は、ばらばらで1点が国府跡に近い他は、どれも国府からやや離れたところから出土しています。これは、一つの考え方として、このような土器を必要とする人達の住まいがこのように広がっていたとも想像されます。いずれにしても、国府では他の集落では見られない儀式のようなものが行われ、それに使われたものと考えられます。

(府中町・府中町ビル地区の調査から  
塚原)



1. 京王桶久保用地区出土    2. 府中町ビル地区出土  
3. 高橋昭宅地区出土



◀9/30 インド音楽祭

9月30日にインド音楽祭が開催されました。台風の影響で大荒れの天気にもめげず、大勢の聴衆が集まったのには思わずびっくり。エントランスホールにシタールやバンスリの音がエコーして、気分は最高潮

こめっこクラブ ▶  
稲刈り～脱穀

今年は夏の天気がよく例年になく大豊作。おかげで稲刈り、脱穀はたいへん。昔の脱穀機も大活躍しました。

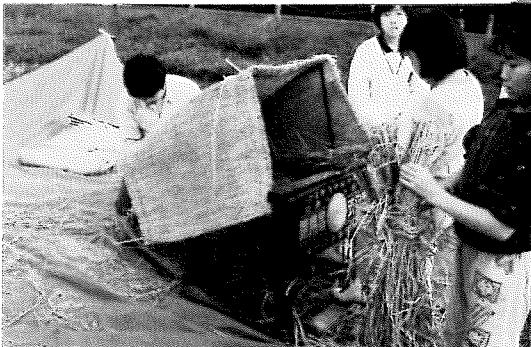
10/13



10/13



11/17



10/13

あれこれ

## 暮の市

人が集まるところに市ができ、市ができるところに人が集まる……。市（マーケット）はいつの時代にも流通経済の要として、都市や村落には欠かせない存在でした。

しかし、単なる広場が市になるわけではありません。道と道が交わる交通の要衝や神社や寺の門前、また河原や中洲や村と村の境の地などに市が立てられました。物の交換や売買は本来神聖な行為であり、世俗の権威が及ばない場所で行われるからだと説明されることもあります。

写真は、1959（昭和34）年頃の大国魂神社の暮の市の光景です。12月25日から3日間、正月のお飾りや竹細工などのほかいろいろな日用雑貨が並びますが、特に大きな籠が目立つので、カゴ市としても親しまれてきました。古くは現市役所西側の川崎街道沿い（横街通り）をにぎわしていましたが、車の交通量が増え、この頃

より場所を境内に移したようです。

年間を通じて頻りに開かれていた市も、次第にその経済的機能を失い、11月の西の市や年末の暮の市などの特色ある市だけが残り、場所を変え品を変えながらも、なおも「神」の下で市が健在であることもおもしろい事実といえます。

(0)



イッワオ  
メーシヨシ

特別展

## 「伊勢へ奈良へ—幕末の旅と社会」

3月24日(日)～5月6日(月)

江戸時代には多くの人々が旅に出るようになりました。東国の人々にとっても、信仰や娯楽目的で伊勢や奈良・京都などをめぐることが、生涯の憧れであったようです。府中でも六所宮

神主の国学者猿渡盛章をはじめ、いく人かが紀行文や道中日記を残しています。本展ではこのような人々の旅を追体験してみます。さらにこうした旅や信仰が幕末の「おかげまいり」や「ええじゃないか」に発展し、明治維新に至る激動の時代を導いていった様子を探ってみます。



文政度御蔭群参之図（神宮徴古館蔵）

あるむぜお 第14号  
al museo イタリア語  
“博物館で”“博物館にて”の意  
発行年月日 平成2年12月25日  
発行 府中市郷土の森  
〒183 東京都府中市南町6-32  
☎0423-68-7921